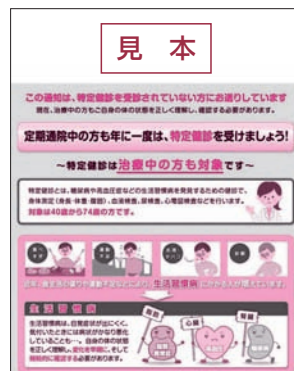


特定健診・医療機関未受診の方へ 受診促進のための通知を送付します

—対象は国民健康保険に加入している40歳～74歳までの方—

平成27年度に策定したデータヘルス計画に基づき、被保険者の健康の保持増進を図るため、国民健康保険に加入されている40歳から74歳までの方で、次の項目に該当する方へ特定健診や医療機関への受診を勧める通知を、10月中旬頃に送付します。

通知の対象者		通知内容
特定健診未受診者	生活習慣病治療のため通院をしているが、特定健診を受診していない方	特定健診の受診勧奨
生活習慣病治療中断者	平成27年度中に生活習慣病治療のため定期的な通院をしていたが、途中から通院を中断していると思われる方	医療機関への受診勧奨
健診異常値放置者	特定健診の結果に異常値があった方で、生活習慣病治療のための通院をしていないと思われる方	



特定健診未受診者通知
(見本)

※平成27年度（平成27年4月1日～平成28年3月31日）に特定健診を受診していない方や、生活習慣病治療のための通院が確認できない方を対象としています。

～ご自身の健康状態をチェックするためにも、年に一度は特定健診を受けましょう～

■問い合わせ■ 医療保険課 医療保険グループ ☎52 - 1111 (内線163)

常陸大宮市史編さんだより

Vol.1

○市史編さん、はじまります

平成28年8月8日、市役所で第1回常陸大宮市史編さん委員会が開催され、三次市長から委嘱状及び任命状が交付されました。ここに、市史編さん事業は本格的にスタートしました。

合併10周年を契機に動き出したこの事業は、市内全地域をあらゆる角度から再発見・再評価しようとするもので、ふるさとへの愛着と誇りを育み、市の一体化を推進する“新たな「まちづくり」”の基礎となることを目指します。



▲委嘱状を渡す三次市長（右）と高橋委員長（左）



○市史編さん委員会と6つの部会

市史を作るにあたって、新たに設置された編さん委員会は、①考古、②古代・中世史、③近世史、④近現代史、⑤民俗、⑥自然の6部会で構成され、茨城大学の高橋修教授（古代・中世史）を委員長とする専門委員6人が各部会長として就任しました。

今後、各部会を中心に調査が進められますが、詳細な調査を実施していくためには、市民の皆さんのお力添えがなくてはなりません。よりよい「常陸大宮市史」を作っていくために、ご協力をお願いします。

■問い合わせ■ 歴史文化振興室 ☎52 - 1450

地域おこし協力隊

No.6

がゆく

移住コンシェルジュの木元です。

最近、常陸大宮市について知る活動に加え、他地域での取り組みについても学んでいます。9月9・10日に行われた「いばらき地域づくり人材育成講座」では、つくば市北条地区で地域活性化に取り組んでいる方から話を聞くことができました。「若者が外へ出て行ってしまい、高齢化が進んで地域の元気がなくなってしまう」というのは、どこの地方も共通の課題です。

しかしここに、世代と地域を越えた交流が生まれることで、住民が誇りと元気を取り戻し、これまで自分たちだけでは出来なかった新しい活動が生まれます。これこそが地域活性だ！と感じました。

そして私たち地域おこし協力隊の役割も、まさにこのような交流を生む「ことおこし」をすることだと思いました。常陸大宮市と若い世代・都市部の人をつなぐ活動を展開していけるよう、頑張っていきたいと思います。



『地域資源×自分の能力』
できそうな事を発表



2枚の写真は、国登録有形文化財の土蔵造りの蔵の中で行われたワークの様子です。実際に見て回って発見した地域資源と自分の長所・できる事を活かして、どのような活動が展開できるかグループで話し合いました。

常陸大宮市史編さんだより

Vol.2

○新しい市史をつくる

「市史」「町史」「村史」という、いわゆる自治体史は、自分たちの住む土地がどのような歴史をたどってきたかを知る貴重な資料です。

本市では、かつて旧町村ごとに自治体史が作られていましたが、中には刊行から40年近く経過しているものもあり、最新の調査成果が反映できていません。

新たに編さんされる「常陸大宮市史」では、近年発見された資史料や研究の成果を盛り込むとともに、他地域との関係を広い視点で捉えながら、皆さんと一緒に新しい市史を作ることを目指します。



▲ふすまや屏風の裏に古文書が貼られていることもあります

町村名	自治体史(市町村史)	発行年
大宮	大宮町史	昭和33年
	大宮町史	昭和52年
	大宮町史資料集	昭和55年
山方	山方町誌 上	昭和51年
	山方町誌 下	昭和57年
緒川	緒川村史	昭和57年
御前山	御前山郷土誌	昭和51年
	御前山郷土誌改訂版	平成2年
美和	美和村史	平成5年

▲これまでに刊行された自治体史一覧

○意外と身近な場所にある「文化」

普段は気づきにくいかもしれませんが、本市には、貴重な歴史資料や史跡が数多く残されているほか、古くから伝わる文化や伝承も豊富です。しかし、それらの中には、時間の経過とともに忘れ去られつつあるものや、すでに失われてしまったものも存在します。皆さんが幼い頃から慣れ親しんだ言い伝えや行事、あるいは自宅に眠ったままの史料など、意外と身近なところにそうした文化は存在します。

市史編さん事業は、先人たちによって紡がれてきた歴史や伝統を見直し、光を当てる事業でもあります。祖先や私たちの誇りを未来へ引き継ぎながら、新たな常陸大宮市の礎を築いていくために、ご協力をよろしくお願いいたします。

■問い合わせ■ 歴史文化振興室 ☎52-1450

○第2回市史編さん委員会が開かれました

9月26日、第2回常陸大宮市史編さん委員会が開催されました。委員会では、本市の特徴や特筆すべき歴史について6つの部会がそれぞれ報告。その後、全体の共通テーマを検討するための話し合いが行われました。特に、河川や山林などを利用した文化・産業や周辺地域との関係性について、多くの議論が交わされました。

また市史編さん事業をアピールするため、市の歴史を題材にした講演会や動植物の観察会など、子どもからお年寄りまで参加できるような事業を実施してはどうかという提案もありました。具体的にどのような事業を開催するかは、来年以降のお楽しみです。市民の皆さんにも市史編さん事業に参加してもらい、多くの方に親しまれる「常陸大宮市史」をめざします。

○今後の市史編さんだより

今回で第3回を迎えた「市史編さんだより」。次回からは、市史編さんの中心となる各部会長が、自己紹介を兼ねた一文を書く予定です。“常陸大宮市”の知られざる一面を紹介してもらえるかもしれません。

また前回掲載した、身のまわりや地域にある歴史や文化について、引き続き情報の提供をお願いします。古くから伝わる言い伝えや古文書など、心当りがある方は下記までご連絡ください。よろしくお願いします。

部 会	部会長	所 属
考古	鈴木 素行	日本考古学協会
古代・中世史	高橋 修	茨城大学
近世史	添田 仁	茨城大学
近現代史	佐々木 啓	茨城大学
民俗	大津 忠男	茨城県立歴史館
自然	桐原 幸一	茨城生物の会

▲市史編さん委員会各部会長一覧

■問い合わせ■ 歴史文化振興室 ☎52 - 1450

地域おこし協力隊

No.7

がゆく

地域おこし協力隊の岩崎です。

私は、3年に1度開催の伝統行事「西塩子の回り舞台」に、8月末からガイド資料の制作として関わりました。この行事は、舞台を作る過程を含め約2か月間楽しむことができます。

公演前の10月9日には、回り舞台見学ツアーが行われました。舞台の見学の後、自分が作成した資料をもとに、緒川総合センターで回り舞台の特徴などを解説しました。



▲回り舞台の特徴を参加者に解説

また10月15日の本公演でも、会場内を回りながら解説を行いました。本公演の来場者は約5,000人でしたが、公演翌日も多くの見学者が来ていて、皆さん熱心に見学していました。

私は、ここにしかない魅力たっぷりのこの舞台を、県内外を問わず多くの方に知って欲しいと思いました。そのためにも、情報発信担当として情報を工夫して発信していく必要があるのではないかと強く感じました。

地域おこし協力隊HP「ごじゃっぺライフ」へ

GO



市史は「まちづくり」の基本資料一

茨城大学教授・市史編さん委員長 高橋 修

<常陸大宮市史に求められるもの>

常陸大宮市史の編さんが始まりました。審議会において有識者や市民など、様々な立場からの意見が「市史編さんの基本方針」としてまとめられ、それに従って組織された編さん委員会が、調査や研究、執筆にあたります。



▲古代・中世部会長でもある高橋委員長

第一回の編さん委員会で、私が委員長に選出されました。近畿・東海・関東など、各地の自治体史の編さん・執筆に携わってきました。その経験を活かして、市民の皆さんの誇りになるような充実した「常陸大宮市史」をまとめたいと思っています。よろしくお願いいたします。

今日の自治体史編さんには、何が求められるのでしょうか。もちろんわかりやすさや読み物としての面白さ、目新しさも必要でしょう。斬新な装丁やレイアウトを考えてもよいかもしれませんが、しかし私が一番重視したいのは、「郷育立市」のスローガンを掲げる常陸大宮市の、将来にわたる「まちづくり」の基本資料としてもらえるような市史を、ということです。

<個性輝く客観的な市史>

編さんにあたっては、史実に基づきながら常陸大宮市の個性を輝かせたいと思っています。常陸大宮市域では、八溝山系の麓、那珂川と久慈川にはさまれた特徴ある自然環境のもとで、個性豊かな歴史と文化が育まれてきました。弥生時代の人面付土器は、この土地を象徴するユニークな造形です。

囚われの身ながら頼朝に諫言した岩瀬与一太郎や、佐竹本家に反旗を翻した部垂一族のような反骨の中世武士たちの故郷でもあります。

近世には、紙生産が地域に富をもたらし、水戸藩の経済を支えました。

詳しくは、この誌面で編さん委員の先生方に紹介してもらいます。



▲岩瀬与一太郎諫言図絵馬 (市内岩崎 春日神社蔵)

そうした歴史を、学術的・客観的に叙述をするためには、資料の調査・収集を徹底して実施しなければなりません。今は関心を持たれていない資料でも、未来の市民や研究者なら、そこから重要な事実を解明できるかもしれません。今、関心をもたない資料にも、100年後には光が当てられるかもしれないのです。

今回の編さん事業では、「史料編」6冊の他に報告書等も刊行し、市民の活用にとともに、未来への財産として残したいと考えています。



▲近年の調査により中世の城跡の発見も相次いでいます

■問い合わせ■ 歴史文化振興室 ☎52 - 1450

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター所長 鈴木 素行委員（考古部会長）

1973（昭和48）年、中学生の私は大宮町下村田で古墳が発掘されていることを聞きつけ、一人自転車で向かいました。掘り起こされた古墳の石室や住居跡を見て回り、父親から借りたカメラで写真を撮りました。



▲一騎山古墳群（石室）

この大宮工業高等学校の建設に伴う一騎山古墳群の発掘調査は、当時の大宮町としても現在の常陸大宮市にとっても、最初の緊急発掘でした。現在、遺跡は姿を消してしまいましたが、発掘調査の報告書が刊行され、出土した遺物が残されたのがせめてもの救いでした。遺跡を跡形もなく破壊するのではなく、歴史との共存を図る方策の1つが記録なのでしょう。



遺構の様子を撮影する鈴木委員▶

2006（平成18）年、私は仲間と泉坂下遺跡の学術発掘を敢行しました。現地は水田のため、地表面を観察しても遺跡があるとはなかなか気づきません。地権者である菊池榮一さん（故人）が採集し、歴史民俗資料館と地元の小学校に寄贈されていた石器や土器だけが手掛かりでした。発掘の初日に人面付土器が出土し、緊張を強いられることになりましたが、それはまた発掘調査というものの醍醐味を体感させてくれる日々でした。



▲人面付土器「いずみ」発掘の様子

土中から姿を現した人面付土器は、菊池さんにも見ただけでいただきました。調査終了後にいただいた礼状の、「我先祖の掘り起こされた大昔の遺物の様な気がして、感慨深いものがあります」と書かれた一文が印象的でした。もちろん血縁関係などは立証できませんが、同じ土地に生活を営んだ先人への気持ちなのでしょう。保管されていた菊池さんの寄贈資料が、人面付土器「いずみ」を誕生させたのです。

2016（平成28）年、常陸大宮市史編さん委員会の中に考古部会が組織され、活動を開始しました。私自身は微力なので、部会には各時代の専門家に集まってもらいました。過去の発掘調査や未報告の資料を現在の研究水準で公表し、広く永く活用できる市史を目指したいと考えています。まだまだ埋もれた資料があるはずです。この場を借りて、市民の皆さんには情報の提供をお願いします。

■問い合わせ■ 歴史文化振興室 ☎52 - 1450

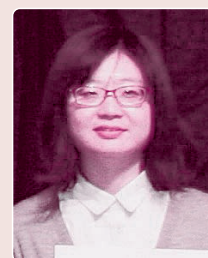


いっしょにまちづくり



私が受けている授業で、県北地域に移住者を増やすための施策を考える機会がありました。そこで、常陸大宮市に移住し農業の分野で活躍している方々に話を聞き、いくつかの提案をしました。

1つ目は、民泊等で子どもたちに「農業の楽しさ」を知ってもらうこと。2つ目は、農業を学ぶ学生向けのインターンシップを行い、「農業の場としての常陸大宮市」を意識してもらうこと。3つ目は、移住の生活をサポートするコンシェルジュを置き「住みよい、終の住みか」として選んでもらうことです。これらを県主催の「地方創生政策アイデアコンテスト」で発表し、奨励賞を受賞しました。卒業後は地元の栃木県に戻る予定ですが、何らかの形で茨城に関わっていかれたらと思っています。



茨城大学人文学部
4年 松本奈津美

常陸大宮市史編さんだより Vol.6



茨城大学人文学部准教授 添田 仁委員（近世史部会長）

このたび市史編さん委員会に加えていただいた添田です。主に江戸時代の歴史を担当します。よろしくお願いします。

八溝山系の山々と木々、そして那珂川・久慈川がたえる水の流れに囲まれた常陸大宮市。豊かな自然、それも常陸大宮市の個性の一つです。この季節は、湯気が立つけんちん蕎麦を地産の日本酒と一緒に流し込んで、自然がもたらしてくれる恵みを堪能する方も多いでしょう。私もその一人です。

私たちの生活が、多かれ少なかれ自然の条件を基礎にして成り立っていることはいうまでもないでしょう。

江戸時代は今と比べて、人間がより自然を身近に感じていた時代といえるでしょう。

市域で暮らした人びとの生活も、自然の恵みなしには成り立ちませんでした。西の内紙の材料となる楮、諸沢や下小瀬の火打石、高部の材木、諸沢の粉こんにゃくなどが、水戸藩のふところを温めました。山や川の資源を大切に活用するしくみが地域のなりわいを支えたのです。一方で、永田茂衛門親子によって那珂川・久慈川に築かれた巨大な灌漑施設（堰）が下流域を有数の田園地帯に変えたように、人間が自然の力を操るための技術も進歩しました。



▲大正期の辰ノ口堰と瀬割堤
（『水戸藩利水史料集』より転載）

ゆえに、自然が人間の歴史に何を刻んできたのかということは、地域の歴史を考える際に無視できない大事な問題です。しかし、これまで自然の重要性は認識されていても、自然と人間、二つの歩みを編み込むような歴史叙述はあまりなされてきませんでした。たとえば歴史の教科書を見ても、人間が自然環境に与えた影響について述べた部分に比べると、気候や地殻の変動に制約された社会のあり様についての記述はかなり少ないです。新しい市史でも、「自然編」が「通史編」とは別に編まれる予定になっています。



▲幕末期の辰ノ口堰元付近『辰ノ口分江全図』
（『水戸藩利水史料集』より転載）

そして、ときに行き過ぎた開発が、土砂くずれ、洪水、獣害のような災害となって人びとの生活と命を脅かし始めたのです。

近年日本列島で頻発している自然災害は、自然と人間社会との関係をどのように考えるべきなのか、私たちに重い問いを突きつけているように思います。江戸時代の歴史には、近代以降の社会が忘れてしまった、自然と人間のつき合い方のヒントが刻まれているのではないのでしょうか。新しい市史では、自然と人間の歩みを別々に把握するのではなく、自然と人間が織りなす歴史を描くことに力を注ぎたいと考えています。

■問い合わせ■ 歴史文化振興室 ☎52 - 1450

常陸大宮市史編さんだより Vol.7



「激動の時代の常陸大宮を描く」

茨城大学人文学部准教授 佐々木 啓委員（近現代史部会長）

このたび、常陸大宮市史編さん委員会の近現代史部会長を仰せつかりました。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、私たちの部会の名称である「近現代史」とは、一体いつからいつまでを言うのでしょうか。これについては学術的にいろいろな議論があるのですが、私たちはさしあたり明治元年（1868年）から現在までを想定しています。仮に2017年を現在と考えるなら、合計149年の歴史ということになります。

近現代史というと、まずは明治・大正・昭和（戦前・戦中）といった激動の時代を思い浮かべるかもしれません。本市域でも、文明開化に始まり、日清・日露戦争、大正デモクラシー期を経て、第二次世界大戦に至るまで、人びとを取り巻く環境は大きく変貌しました。

目覚ましい発展があった一方で、戦争やそれに伴う社会の混乱など、過酷な出来事もたくさんありました。

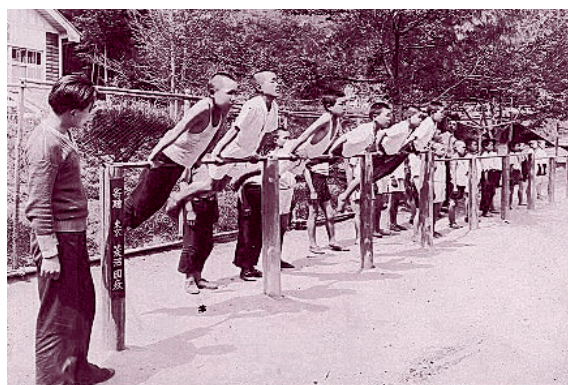
先日、戦争中の旧八里村の公文書を調べる機会がありましたが、若い男性の多くが兵役召集や徴用によってこの地域を後にしていく様子や、銃後に残された方々が必死になって物資の供出に尽力する様子が、痛切に示されていました（拙稿「アジア・太平洋戦争と常陸大宮」『常陸大宮市文書館報』第2号、2016年）。こうした激動の時代の一つひとつの経験を丁寧に市史に

まとめていくことは、私たち近現代史部会の必須の課題です。

一方、今回市史を編さんするにあたって、もう一つ大事なことがあると思っています。それは、「戦後の市民の歩みを描き出す」ということです。今年が戦後72年にあたりますから、明治以降149年の歴史のうち、実は半分近くを戦後が占めていることとなります。市史が完成する頃には、おそらく「近現代史」の半分以上を戦後が占めるということになるでしょう。



▲国道118号線大宮バイパス開通時のようす（昭和58年12月）



▲体操の授業風景（旧八里小、昭和戦前期）

こうして分厚いボリュームを持つようになってきた戦後という時代を、しっかりと描いていきたいと思えます。戦後史というとやや平坦なイメージを受けるかもしれませんが、GHQによる占領統治を皮切りに、高度経済成長に伴う経済的豊かさの実現、技術の発展と生活の変貌、都市への人口流出とそれに伴う過疎化の問題、などなど、歴史として検討すべきテーマは多数に及びます。戦後もまた、激動の時代だったのです。

市民の皆さんのお力添えを得ながら、こうした激動の歴史を後世に伝えるべく、尽力してまいりたいと思えます。

■問い合わせ■ 歴史文化振興室 ☎52 - 1450

常陸大宮市史編さんだより Vol.8



「生活の中の文化を『市史』に記録しましょう」

茨城県立歴史館首席学芸員 大津 忠男委員（民俗部会長）

常陸大宮市は5つの旧町村が合併して、とても広い面積を持つ市になりました。市民の方でも、自分の住む地域以外のことは分からないという方もいるのではないのでしょうか。また地元の行事でも、詳しくは分からないと思っている方もいるかもしれません。

例えば、「西塩子の回り舞台・祇園祭・おかしま様行事など、どうして自分の住む市にはこのような行事があるのだろう」「山間部に住んでいる人たちと、比較的平らな地域に住んでいる人たちの暮らしや考え方に違いはあるのだろうか」「この地域では、なぜ和紙がたくさん作られ、どうやって作ったのだろうか。どこでその紙は使われたのだろうか」といった疑問をお持ちではないでしょうか。

その「どうして」「なぜ」という疑問を私たちも共有し、答えを探したいと思っています。現在分からなくなっていることでも、おじいさんやおばあさんに聞いてみるとその理由が分かることもあります。今、行われていることは、少し前の時代の先輩たちから受け継いできた事が多いのですから。今回作られる市史は、特別有名な人たちの歴史ばかりを綴るものではありません。今生きている私たちが、普段の生活の中で行っている行事や何気ない生活文化も、大切な記録として残していきたいのです。



▲ 西塩子の回り舞台



▲ おかしま様行事(盛金地区)

難しいことはありません。お祭りや仕事の現場や地区の集会などを見学させてもらいながら、市民がどのような生活をしてきたのかを教えてもらい記録していこうと思っています。

山や川など自然豊かな常陸大宮市で生きていく中で、人々がどんな暮らしぶりや、どのような文化が育まれてきたのか、一緒に考えさせてください。きっと他に誇れる文化がたくさん見つかるはずですよ。自分達の先輩がどのような苦勞をし、工夫をし、楽しみを見つけ出して生きてきたのかに気付けるかもしれません。

私たち民俗の調査グループは、皆さんの所にうかがいます。常陸大宮市を知りたい私たちにとって、ここに住む皆さん一人ひとりが先生です。ぜひ、気軽にいろいろなことを教えてください。

■問い合わせ■ 文化スポーツ課
文化スポーツグループ
☎ 52-1111（内線 344）



常陸大宮市史編さんだより Vol.9



「常陸大宮市の市史編さん調査（自然）を始めるにあたって」

茨城生物の会 桐原 幸一（自然部会長）

常陸大宮市は県内で2番目の面積を持つ大きな市です。東は阿武隈山地、北西は八溝山地に囲まれ、東側を久慈川、西側には那珂川が流れています。

一番高い北側の尺丈山（511 m）をはじめ、東側を明山、箆岩山、北西側には鷺子山、小瀬富士、小舟富士、高岩山、南側には山王山が周辺を囲んでおり、標高差は、南側の久慈川沿いの標高が10 mですから、約500 mあります。

気象も天気予報を注意深く見ていると、隣接する栃木県の子報の方が的確に思えることがあり、常陸大宮市の自然を構成する環境が、変化に富んでいて、複雑であることが実感されます。

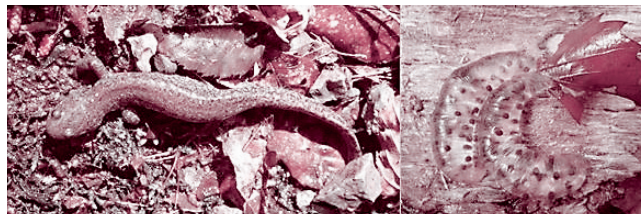
また、奥久慈自然公園、御前山自然公園、鷺子山自然環境保全地域などの貴重な自然もあり、こうした自然公園等を挙げるまでもなく、常陸大宮市には貴重な動植物の生息が記録されています。

植物では、イワウチワ、カタクリなど、昔は普通に見ることが出来たものの、今ではすっかり数の減ってしまった種が数多く生育しています。

動物も、ムササビ、オオムラサキなど、昔は身近に見ることの出来た種が、今では姿を見かけることも少なくなってきました。もちろん、陸上の動物だけでなく、久慈川や那珂川には貴重な水生生物が生息したり、遡上したりしています。

今回の春の調査で気付いた貴重な種の例を挙げてみます。それはトウキョウサンショウウオです。

■問い合わせ■ 文化スポーツ課 文化・スポーツ G
電話 52-1111（内線 344）



▲ トウキョウサンショウウオとその卵のう

トウキョウサンショウウオは、主に関東地方、特に茨城県の低丘陵地に生息します。私たちが子どもの頃、沢の湧き水が流れる細流で簡単に見つけることができ、ヤマドジョウなどと呼ばれていました。

今回、調査してみると、埋め立てなどで多くの谷津などが失われ、生息場所も個体数もかなり少なくなっていました。この種は茨城県などで減ってしまうと、地球上から消滅してしまうことになります。改めて今回の市史編さんの調査の大切さを感じました。

自然調査ではみなさまの地区に入らせていただきます。気づいたことはお気軽にお伝えください。また、こんな動植物を見たなどの情報を担当事務局にぜひお寄せ下さい。



相川での自然観察会の様子(茨城生物の会)

調査結果は自然観察会などを開催することで、広くみなさまにお知らせしようと考えています。地域の自然やそこに生息する動植物について知っていただき、大切にさせていただくことこそが、常陸大宮市の進める郷育立市につながると思います。



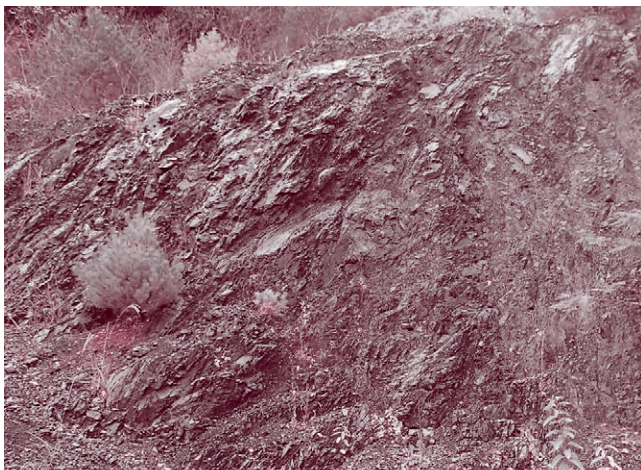
常陸大宮の大地を探る

理学博士 菊池 芳文（自然部会地質分野専門調査員）

2011年の「東北地方太平洋沖地震」以降、各地で地震が頻発し、巨大地震の発生や火山の噴火に注意が注がれています。そうした地球の活動は、人の営みに被害を及ぼすことから“負の出来事”と言えます。しかし、歴史的にみると生物に欠かせない多くの恵みを与えてくれているのも事実です。

地球の歴史は約46億年といわれています。現在に至るまでには惑星の地球衝突、地球凍結や温暖化、巨大地震や巨大噴火など、想像を絶するような事件が多数発生しました。また、“進化は絶滅の歴史”とも言われ、数知れない種類の生物が絶滅し、同時に新たな動植物が誕生したことも判明しています。つまり、現在の自然環境は、全て地球の活動から出来上がったということです。常陸大宮市でも地球の活動から誕生したのがあります。それは、金・砂金、火打石（瑪瑙・玉髓）、石炭（亜炭）、碎石に代表される地下資源で、ある時期（一部は現在も）の地域経済を担いました。

地質分野では筆者、千葉科学大学教授八田珠郎氏、同大学研究補助員菊池美波氏を中心に、現地調査と試料分析装置を駆使し“専門性の高い市史”の完成に向けた研究を進めて行く所存です。



▲ 陸源性堆積物の泥岩層(家和楽)

常陸大宮の基盤を成す地層

常陸大宮市の大地は、今から1億5千万年以上前の中生代ジュラ紀の海底で堆積し、その後の隆起で陸地となった八溝層群の地層が基盤となっています。八溝層群の特徴は、陸地起源の堆積物である礫岩、砂岩、泥岩と、陸地から離れた遠洋の環境で堆積したチャートが、破壊や変形を受けて様々な大きさの岩塊となり、混在した状態で堆積していることです。

これは、海洋プレートが地球内部に潜り込む際に、陸地や周辺域の地層を引きずり込むことで発生した現象で、付加体堆積物とも呼ばれます。

ほかに、マグマが貫入し冷え固まって花崗岩類も認められます。市内の金はマグマの貫入に伴って誕生したものです。そのため新たな鉱物の存在も期待され、市史編さんは意義深いものとなりそうです。



▲ 遠洋性堆積物のチャート層(舟生)

■問い合わせ■ 文化スポーツ課
文化・スポーツ G
☎ 52-1111（内線 344）



調査への協力をお願いします

常陸大宮市史編さん事務局 高橋 拓也
(常陸大宮市教育委員会文化スポーツ課)

地域の歴史を守るために

近年、開発による土地の変化や家屋の解体、過疎化の影響に伴い、古い資料が散逸・処分され、地域から徐々に姿を消しつつあります。また、歴史の語り部となる方々が高齢化していることもあり、このままでは、先人たちが残してきた記憶や足跡が永遠に失われてしまうことになりかねません。

「常陸大宮市史」には、まちづくりの基礎資料としてはもちろん、これまで伝えられてきた大切な歴史や暮らしを記録し、次世代へ継承するという使命があります。ふるさとの歴史を守り、後世へ引き継いでいくためには、皆さんの協力が必要不可欠です。

調査対象資料

今回新たに作る市史は6つの分野（考古、古代・中世史、近世史、近現代史、民俗、自然）から成り立っています。そのため、調査の対象となる資料も、考古遺物（土器・石器類）や古文書をはじめ、史跡、祭礼、石造物、建築、動植物、鉱物など多岐に渡ります。皆さんが日常の一部として捉えているものや、口伝えに聞いてきた語り、記憶なども、実は昔の足跡が刻まれた大事な資料かもしれません。

例えば、ご自宅や地区に保管されている古文書・日記などは、当時の社会情勢や人々の暮らしを知る重要な手がかりとなります。また、古写真や地図、フィルムに残された映像記録など、かつての街並みや生活の実態が分かるものについても情報を収集しています。もし、ご自宅などでこういったものを見かけたり、「古そう…。これは何だろう？」というものがありましたら、事務局までご一報ください。

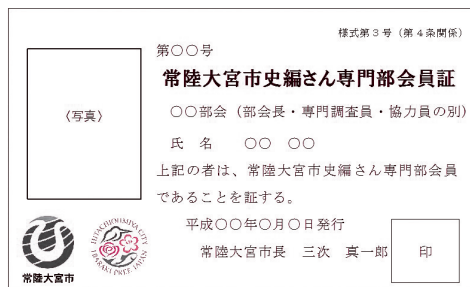
市史編さんで調査する資料（一部）

部会名	調査対象（例）
考古	考古遺物（土器、石器ほか）、遺跡、古墳など
古代・中世史	古文書、棟札、石造物（五輪塔、宝篋院塔）、城址など
近世史	古文書、村絵図、石造物（碑文、信仰）など
近現代史	古文書、古写真、映像記録、碑文など
民俗	祭礼、行事、民間伝承、くらし、信仰、絵馬など
自然	動物、植物、昆虫、地形、鉱物、岩石など

現地調査について

昨年8月に市史編さん事業が動き出してから、まもなく1年が経過します。この間、6つの部会が立ち上がり、調査の準備を進めてきました。今後、身分証を携帯した調査員や市職員が各地域を訪問し、聞き取り調査の実施や情報の提供を呼びかけることがあります。皆さんのご理解とご協力をお願いします。

※調査員がご自宅等を訪問する際は、下図の会員証を提示します。また、文化スポーツ課職員も同行します。



■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎ 52-1111（内線 344）



縄文時代の新潟県との交流

2002（平成14）年、新潟県立歴史博物館で、新潟県の考古学研究者達が、常陸大宮市下村田の坪井上遺跡から発掘された1点の土器を取り囲みました。「五丁歩の土器とソックリだ。」と第一声があがりました。新潟県魚沼市の五丁歩遺跡の土器とよく似ており、魚沼地方で作られた土器が常陸大宮市まで運ばれたのではないかと意見が出されました。この時期の縄文土器を研究テーマとする私もその場に居合わせました。

この土器は、縄文時代の中頃（今から約5,000年前）のもので、この時期、東北地方から常陸大宮市を含む関東地方北部では、縄目模様“縄文”と立体的な装飾で飾られた縄文土器が流行します。しかし、先ほどの坪井上遺跡の土器には“縄文”が見られません。粘土紐と線だけで装飾しています。このような土器は、北陸地方に多く見られます。そのため、この土器が魚沼地方から運ばれたと判断されたのです。北陸地方を代表する有名な「火焰型土器」も、線と粘土紐だけで文様を描いています。市内の西埜遺跡（野口）からは、「火焰型土器」を真似て作った土器が発掘されています。



考古部会専門調査員 塚本 師也
（公益財団法人栃木未来づくり財団
埋蔵文化財センター調査課長）

坪井上遺跡からは、ヒスイで作った玉（首飾りと推定）が8点出土しています。1遺跡で8点の出土は全国1位です。縄文時代のヒスイの玉は、すべて新潟県糸魚川産で、北海道から沖縄まで発見されています。茨城・栃木の北部は多く出土する地域の一つです。

これらのことから、今から約5,000年前の常陸大宮市の人々は、ヒスイの玉や縄文土器などを通して、新潟県地域の人々と深く関わっていたことが分かります。このように、遺跡から発見された他の地域の特徴を持つ土器や石器から、過去の人々の地域間の交流の様子を明らかにすることができます。これは、考古学が得意とする分野です。



▲坪井上遺跡（下村田）から出土した縄文土器



▲西埜遺跡（野口）から出土した火焰型土器



▲硬玉製の大珠（市指定文化財）

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎ 52-1111（内線 344）

常陸大宮市の戦国時代



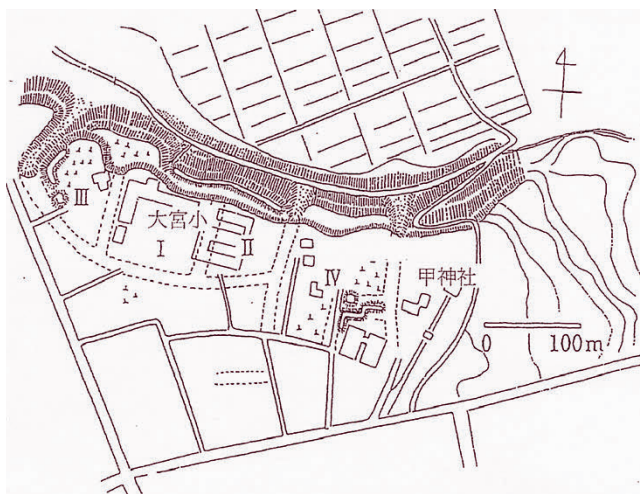
山縣 創明
 県立水戸第一高等学校教諭
 市史編さん専門調査員（古代・中世史部会）

私が主に担当する「中世」という時代は、一般的な高校日本史の教科書では、11世紀半ばの院政期から16世紀半ばの戦国時代までとなっています。それ以前が古代、それ以降が近世という時代区分になります。この区分に従えば、常陸大宮市域に勢力をもっていた佐竹氏は、中世のみならず古代末から近世初頭にかけて活躍したということになります。佐竹氏というと、どうしても隣接する常陸太田市を連想しがちですが、佐竹氏を考える上で常陸大宮市も同様に重要な地域といえます。

とりわけ戦国時代については、佐竹氏が大きく成長する画期となった部垂の乱の舞台となりました。従来佐竹氏における内乱としては、約100年続いた佐竹の乱が注目されがちでしたが、それに続く部垂の乱も佐竹氏の権力確立過程において重要といえます（拙稿「部垂の乱と佐竹氏の自立」『佐竹一族の中世』、2017年）。現在の大宮小学校が部垂城跡になりますが、校舎周辺にある部垂義元墓碑や土塁から往時をしのぶことができます【図1】。

隣接する甲神社には、部垂義元奉納と伝わる「源氏系図」や「佐竹義昭奉加帳」などが残されており、戦国時代の佐竹氏を研究するうえでの貴重な史料となります。

【図1】部垂城縄張り図
 （『図説 茨城県の城郭』より転載 作図：青木義一）



探しています！

古文書・古写真・古い石塔・昔話・珍しい動植物などは、本市の歴史を調査する重要な手がかりです。お心当たりがありましたら、ぜひご一報ください。

また市内には、部垂城をはじめ長倉城や野口城、小場城など佐竹氏の有力な一族衆や国人衆の拠点となった城跡や、高部館や小舟城などの佐竹氏が下野東部に進出するうえで重要な「境目の城」が多数あった地域であるということも大いに注目すべき点だと思います【図2】。

今回の市史編さんでは、上記のような従来あまり注目されてこなかった史料や城跡にも光をあてていければと考えています。

【図2】常陸大宮市域における城跡分布図
 （前川辰徳「佐竹氏と下野の武士」『佐竹一族の中世』より転載）



問い合わせ

文化スポーツ課
 文化・スポーツグループ ☎ 52-1111（内線 344）



鳥類の調査状況及び成果

常陸大宮市の鳥の調査を、今年4月から本格的に始めました。今年度は、主に久慈川水系を調査し来年度は那珂川水系について実施する予定です。

今回は、これまでに確認や撮影ができた貴重な種の一部を紹介します。



茨城生物の会 仲田 立

サシバ (タカ科)

里山を代表するタカの仲間で、夏鳥として渡来します。ヘビやカエルなどを食べます。「ピクイー」と良く鳴きます。



ノスリ (タカ科)

留鳥または漂鳥で、山地林で繁殖し、冬季は農耕地でよく見ることができます。主にネズミ類を食べます。野を擦るように飛ぶのが和名の由来といわれます。



探しています!

古文書・古写真・古い石塔・昔話・珍しい動植物などは、本市の歴史を調査する重要な手がかりです。お心当たりがありましたら、ぜひご一報ください。

サンショウクイ (サンショウクイ科)

夏鳥として、山地の広葉樹林に飛来します。フライングキャッチして昆虫類を食べます。「ピリリー」という鳴き声が、山椒の実を食べてヒリヒリしているように聞こえるというのが和名の由来です。



私は、これまで御前山ダム周辺まではたびたび訪れていましたが、それ以外の常陸大宮市内の鳥の観察を詳しくする機会はありませんでした。縁有って今回の調査をすることになり、里山から山地林に至る、常陸大宮市の自然の豊かさを楽しませてもらっています。

国のレッドデータブックに記載されている貴重な種や近頃数を減らしていると言われるものを含め、これまで82種の鳥を観察することが出来ました。平成31年度までの調査で、どんな鳥に出会えるか、再度クロツグミなどの美しい鳴き声を聞くことができるか楽しみです。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎ 52-1111 (内線 344)

地域の同質性と異質性

私は、近世史（おもに江戸時代）を専門としています。市史編さんでは政治史の視点から、当市域の変遷を考えていきたいと思えます。

さて江戸時代、常陸大宮市域はすべて水戸藩領でした。大子町や常陸太田市、那珂市、日立市、東海村、ひたちなか市なども同様です。ところが、水戸市には旧内原町域に旗本領があり、同じく茨城町などにも旗本領や幕府領があります。図1に見るように、水戸藩領は、ほとんどが水戸以北にまとまっていた。



永井 博
茨城県立歴史館 史料学芸部長
市史編さん専門調査員（近世史部会）

つまり、県北以外の地域は、同一市町村で江戸時代の領主が複数というのが普通なのです。なかにはつくば市や石岡市のように、市域の領主が50人以上にわたっている場合もあります。このような地域では同じ村（ほぼ現在の大字単位）でも、集落ごとに領主が異なることも珍しくはありませんでした。

こうしたことからみると、当市を含めた県北地域は例外的であることがわかります。しかも佐竹氏時代も含めると、同一領主の期間が長期にわたっており、そこで培われた「同質性」は、良くも悪くも現代の県北地域、そして当市域を考えていくうえでも見逃せない視点であると思います。また、反対にそうしたなかで見いだされる「異質性」は、地域の特色を考える視点となるでしょう。

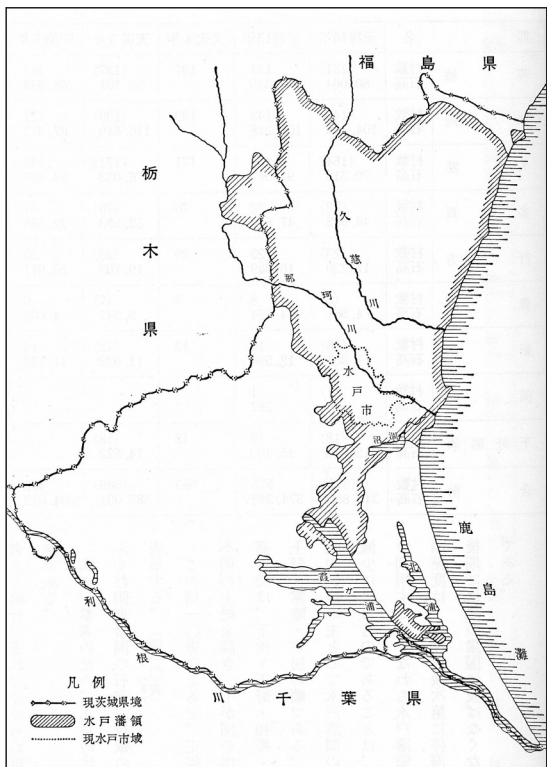


図1 水戸藩領図(『水戸市史 中巻(一)』から)

江戸時代の関東地方は、水戸藩が35万石と圧倒的な石高を有してはいますが、実は大部分は譜代大名や旗本といった将軍家臣の「補給地」となっています。茨城県域全体について幕末時点の石高でみると、もっとも多いのは水戸藩領ではなく旗本領(31万石余)です。幕府直轄領とあわせると約44万石となり、県域全体をあわせた石高のおよそ4割が幕府関係の領地で占められていました。

なお、水戸藩領は一部が栃木県(現那珂川町)にあるため県内の石高は29万石で、4分の1弱の割合になります。



図2 那珂郡図(茨城県立歴史館所蔵)

探しています！
古文書・古写真・古い石塔・昔話・珍しい動植物などは、本市の歴史を調査する重要な手がかりです。お心当たりがありましたら、ぜひご一報ください。

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化・スポーツグループ ☎ 52-1111 (内線 344)

すごろく 双六からみえる常陸大宮の町並み

近現代史部会では、まず合併前の町村史などに学びながら、新しい常陸大宮市史では、どのような特色を出すか、どのような組み立てがよいかを議論することから始め、本格的な調査に着手しようとするところです。

部会での議論で一致していることは、常陸大宮に生きた人々の気持ちや行動が具体的にわかる、「顔のみえる歴史」を、ということです。一口に地域の歴史といっても、様々な側面があります。政治や行政、経済や産業、そして生活や文化。とりわけ生活や文化のようすは人々の日常に近いだけに、意識的に記録が作られることが少なく、なかなか後世に伝えられません。そこで様々な資料にあたっていく必要があります。

さて、ここに旧大宮町の商店を掲載した双六、「大宮町協同商店写真集双六」があります。【図】



【図】大宮町協同商店写真集双六（市教育委員会蔵）

23の商店の写真がはめ込まれたコマをめぐる最後に甲神社で上がりとなる趣向です。地域の中心的な商業地だけあって3軒の宿屋、2軒の料理屋が掲載され、また醤油醸造所、薬品店や書店、そして自転車店なども載っています。土蔵造の店舗もみえる一方で、茅葺きの建物もみえるといった町の風景や店先の様子まで分かります。



佐藤 美弥
埼玉県立文書館学芸員
近現代史部会専門調査員

問題は、この双六はいつ頃作られたのか、ということです。欄外に「写真師檜山静峰」が発行し、「水戸市南町大正印堂」が印刷したとありますが、残念ながら発行年月日はありません。コマのなかにヒントはないでしょうか。7番「満寿屋料理店」には「専売所側」という説明があります。「専売所」とは、1897（明治30）年に設置された、葉たばこの専売所のことでしょう。どうやら明治30年代以降に作られたもののようです。次にそれぞれの写真を見てみると、22番の「黒澤書肆」の写真には書店の店先に立て看板があり、ほんやりと「全科表解」と書いているように読めます。国立国会図書館のデータベースで調べてみると、「全科表解」とは子ども向けの学習参考書で、同館には1910（明治43）年から1913（大正2）年のものが所蔵されています。同書はその後、昭和の初め頃まで出版されたようです。

こうして双六が作られただいたいの時期を推測できました。当時、この双六は地元の商店がお金を出し合い販売促進のためにお客さんに配布した生活に身近な「ちらし」のようなものだったのでしょうか。それが約100年経過した現在、かつての町並みを記録し歴史を語る貴重な資料となっているのです。

探しています！
古文書・古写真・古い石塔・昔話・珍しい動植物などは、本市の歴史を調査する重要な手がかりです。
お心当たりがありましたら、ぜひご一報ください。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎ 52-1111（内線 344）

正月はなぜおめでたいのか？

遅ればせながら、新年あけましておめでとうございます。

昨年はお祭りや古民家の調査などで、市民の皆様には大変お世話になりました。本年も引き続きご指導の程よろしく願いいたします。

さて、年始によく見聞きする「あけましておめでとうございます」という言葉ですが、よく考えてみるとなんだか不思議な挨拶です。なぜ「年が明ける」と「おめでたい」のでしょうか。

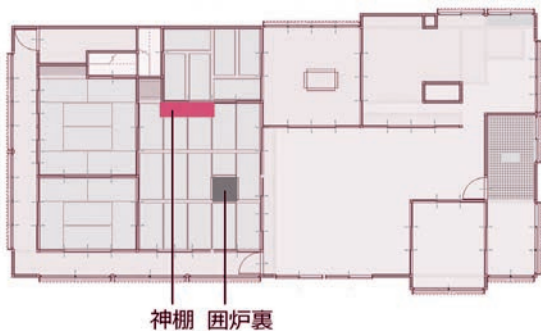
新年＝めでたいという考え方の起源については、いろいろな説がありますが、その内のひとつに「年神への信仰」というものがあります。

年神とは、元日にやってくるイエ（家）や家業の守り神であり、地方によってオトンドサン、お正月様、歳徳様（トシドンは大晦日）など、いろいろな呼び方をされます。お正月のお餅や門松、注連縄、お節料理などは、本来、この年神をまつるために用意されるものでした。

民俗学において、この年神の正体は祖霊（ご先祖様）だと考えられています。つまり、お正月は自分たちの守り神であるご先祖様が、家に帰ってくる時期なので「めでたい」と祝われたのです。

元日に来訪した年神は、その日のうちに帰るのではなく、しばらくは家に滞在すると考えられていました。その間、年神は神棚にまつられます。神棚は多くの場合、居間や座敷などの家族が集まる部屋に設けられました。

下の平面図は、常陸大宮市高部にある古民家のものですが、日常生活の中心だった囲炉裏のある部屋に神棚が拵えられています。【図1】



▲【図1】旧K家住宅の平面図
(民俗部会での調査をもとに作成)



田中 伸吾
市史編さん委員会 民俗部会専門調査員
茨城県立歴史館 史料学芸部学芸課 学芸員

また、地域によっては、作り付けの神棚とは別に、年棚としだなという年神専用の神棚を用意する場合もありました。

下の写真は、1965年（昭和40年）1月15日に里美村（現・常陸太田市里美地区）で撮影された、お正月様（年神）をまつる年棚です。【図2】



▲【図2】お正月様の年棚（藤田稔氏撮影）

近年では、正月に年神をまつる家も少なくなりました。皆さんのお宅では、どのようなお正月の行事が行われたのでしょうか。

調査員がお邪魔したときには、お話を聞かせてください。

探しています！

古文書・古写真・古い石塔・昔話・珍しい動植物などは、本市の歴史を調査する重要な手がかりです。お心当たりがありましたら、ぜひご一報ください。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎ 52-1111（内線 344）

常陸大宮市の金

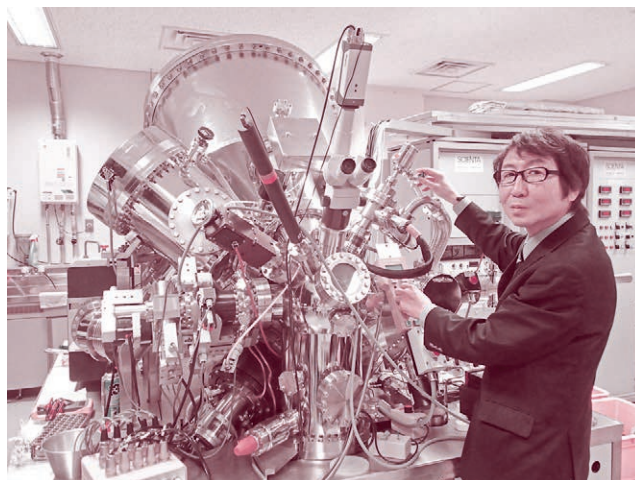
少なくとも奈良時代以降、茨城県北部（常陸大宮市、大子町）から栃木県東部（那珂川町）にかけて、たくさんの金山が発見され、砂金も採られてきました。10年ほど前まで稼働していた本州最後の金山、栃原金山も、この地域にあります。産出される金で高品位（100%近い含金量）のものは、自然金（Au）という元素鉱物として存在しますが、銀との合金エレクトラム（Au、Ag）という鉱物として産出することが多いことがわかっています。また、この他に、含金量としては50%を切りませんが、テルル（Te）合金・銀という鉱物もあります。

古くから金は貴重とされてきました。その理由として、金が酸化や腐食しにくく、薄く延ばすことができるなど、貨幣や装飾品として加工がしやすかったことがあげられます。

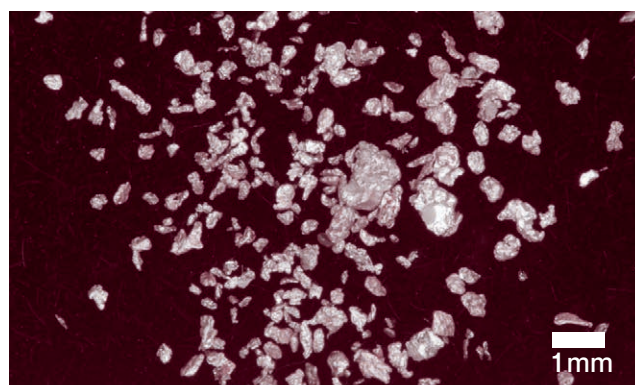
また、材料の表面を薄膜で覆う“金メッキ”も古くから行われてきました。金属を溶かしやすい水銀の性質を利用し、金を水銀に溶かしてアマルガムという合金として塗布し、加熱することで水銀だけを蒸発させる方法で、材料に金メッキを施すことができます。奈良市東大寺の大仏には、茨城栃木県境地域の、主に那珂川町武茂周辺で産出した金を使用し、奈良県や三重県で古くから産する水銀を用いてアマルガム法で金メッキを施しています。加熱によって発生する水銀の蒸気はきわめて有毒なため、大仏建立にあたっては多くの死者が出たといわれています。

金は主に熱水鉱脈に石英や硫化鉱物（硫黄と金属が結合した鉱物）とともに産出します。当地域でも熱水鉱脈が形成され、金、石英や硫化鉱物が誕生しました。マグマが地下深くでゆっくりと冷えて固まっていくときに、石英は最後にできます。化合物になりにくい金は、最後まで結合する相手が見つからず、元素のままですら石英と一緒に産出します。岩石が風化し浸食されて河川に流された場合は、砂金として発見されます。

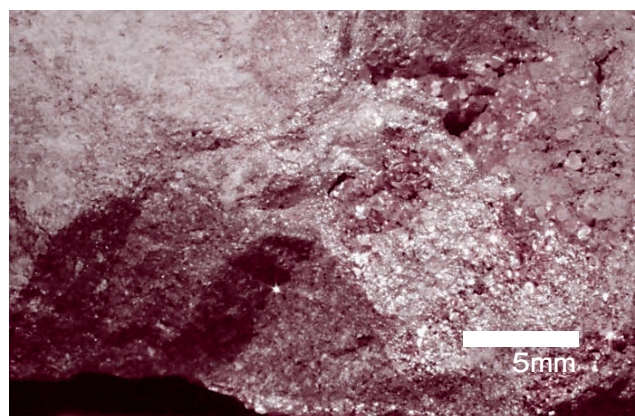
また、金に似た鉱物に黄鉄鉱があります。鉄が硫化した鉱物（FeS₂）なので、金（Au）とは別物です。しかし、黄鉄鉱は多くの場所で産出するため、初めて黄鉄鉱を見た人は、金と勘違いしてしまうことがあります。このため、黄鉄鉱は俗に“愚か者の金”（fool's gold）といわれることがあります。常陸大宮市から大子町にかけては、金に由来する地名が多く残っています。古い記録もたくさんあるようです。この地域で、ゴールデンエリアを作ることが私の理想です。



市史編さん自然部会専門調査員 八田珠郎（千葉科学大学教授 理学博士）
 写真の装置は、X線光電子分光装置（略称 ESCA エス力）。元素と電子状態を分析する装置。



▲金（中生代ジュラ紀八溝層群産）



▲黄鉄鉱（同上産）

撮影：菊池芳文氏（自然部会地質分野専門調査員）

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎ 52-1111（内線 344）



『常陸大宮市史研究』を刊行しました

常陸大宮市史編さん事務局

平成30年3月20日、常陸大宮市史編さん事業で初めての刊行物となる『常陸大宮市史研究第1号』が刊行されました。市史研究は、年度ごとの事業成果を中間報告としてお知らせするもので、年1冊の刊行を予定しています。

調査の過程で明らかとなった歴史や文化、自然環境について報告することはもちろん、本市にゆかりのある人物や資料紹介なども織り交ぜて、本市が辿ってきた足跡を新たな視点で明らかにしていきます。

〈主な掲載内容〉

「座談会—市史編さんと「郷育立市」—」

常陸大宮市史編さん委員会

「藤田稔写真資料仮目録」

—旧大宮町出身の民俗学者・藤田稔の民俗研究（一）—

林 圭史（民俗部会）

「香川敬三と明治の水戸藩士—武田金次郎らの末期—」

石井 裕（近現代史部会）

「常陸大宮市でヒメボタルを確認」

佐々木 泰弘（自然部会）

「文献に見られる常陸大宮市の植物（1）」

藤田 弘道・中崎 保洋（自然部会）

「渡邊明氏採集の常陸大宮市内考古資料（予報）」

萩野谷 悟（考古部会）

常陸大宮市史研究		第1号	
ごあいさつ	常陸大宮市教育委員会 教育長 上久保 洋一		1
創刊にあたって	常陸大宮市史編さん委員会 委員長 高橋 修		3
〈巻頭企画〉			
座談会「市史編さんと「郷育立市」」	常陸大宮市史編さん委員会		5
〈研究ノート〉			
藤田稔写真資料仮目録 —旧大宮町出身の民俗学者・藤田稔の民俗研究（一）—		林 圭史	27
〈資料紹介〉			
香川敬三と明治の水戸藩士 —武田金次郎らの知られざる末期—		石井 裕	41
〈研究ノート〉			
常陸大宮市でヒメボタルを確認		佐々木 泰弘	52(26)
〈資料紹介〉			
文献に見られる常陸大宮市の植物（1）		藤田 弘道・中崎 保洋	66(11)
渡邊明氏採集の常陸大宮市内考古資料（予報）		萩野谷 悟	76(1)
常陸大宮市史編さん事業 活動記録			77
「常陸大宮市史編さんだより」まとめ			94
刊行物紹介			110
2018.3 常陸大宮市教育委員会			

▲常陸大宮市史研究第1号 表紙

平成29年度事業を振り返って

市史編さん事業が本格始動してからおよそ1年半が経過しました。現地調査の実施によって、調査員が皆さんと接する機会も増えています。今後も様々な機会を捉えつつ、市史編さんに関わる身近な地域の情報をお知らせして参ります。

市内には、今なお人知れず眠っている資料や、私たちの知らない歴史が数多く存在するはずです。改めて調査へのご協力をお願いします。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎ 52-1111（内線 344）



▲現地調査の様子（小舟地区）

最も遺跡の数が多い奈良・平安時代

常陸大宮市は、久慈川、玉川、那珂川、緒川などの川を望む台地の上や、川沿いの小高い土地の上など、皆さんの住んでいる足もとに、数多くの奈良・平安時代の村々が埋もれていることが知られています。その数は、大宮地区114遺跡、山方地区4遺跡、美和地区8遺跡、緒川地区1遺跡、御前山地区72遺跡で、全体では199遺跡となります。奈良・平安時代は、常陸大宮市で最も遺跡の数が増える時代なのです。

常陸大宮市の奈良・平安時代の村について考えるためには、発掘調査された遺跡の建物の数やその配置が、年代ごとにどのように変化しているのか（これを「集落変遷」といいます。）を、整理しておかなければなりません。

年代は出土した土器から決めますので、土器の変化とその年代を事前に解明しておく必要があります。そして、それぞれの集落遺跡について、集落変遷が明らかになったら、次はそれぞれの集落の各時期ごとに、建物のようすや使われていた用具類について、詳しく調べる作業が待っています。

このように、ある地域の古代集落跡の分析をおこなうには、長い年月がかかる地味な作業を続けなくてはならないのです。



▲北原遺跡全景



考古部会専門調査員 佐々木義則
(ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社職員)

常陸大宮市史では、そうした長い作業は始まったばかりですが、すでに面白そうなことがわかっています。多くの住居跡が発掘調査された、北原遺跡（道の駅常陸大宮～かわプラザ～のところ）や上ノ宿遺跡（JR常陸大宮駅の東方）などの久慈川流域の遺跡では、どうやら平安時代のはじめ頃に、集落の規模が大きくなるようなのです。

もしかするとその時期に水田や溝などが整備されて、人々が集まってきたのかもしれませんが。理由はこれから考えていきますが、検討作業が進むにつれて、ほかにも知りたいことは次々と出てくるでしょう。

常陸大宮市で、最も遺跡が増える奈良・平安時代の資料分析をとおして、人々の暮らしの地域性が明らかになればと思っています。こうした身近な歴史を知ることが、郷土の誇りにもつながっていくものと考えています。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111 (内線344)



探しています！

古文書・古写真・古い石塔・昔話・珍しい動植物などは、本市の歴史を調査する重要な手がかりです。

お心当たりがありましたら、ぜひご一報ください。